

健兄さん

— N・H に

石川 逸子

本家の裏庭には大きな梅の木があつて

その幹にもたれていた 従兄の健兄さんを覚えています

梅の花は白く まつさかりでした

健兄さんがどんな目をしていたか分かりません

(わたし) は五歳 健兄さんは十七歳でした

梅の花びらをひとひら もらいました

てのひらの上で白い花びらが

魚のようにふるえたのを覚えて

ています

「いくらピカにあうたいうても

四年経つぞ なまけもんが！」

声を荒げていたのは 本家の伯父さんだったでしょうか

「親が無うなっただけしつかりせにゃいけん」とに」

あれは父さんの声だったでしょうか

■詩の作者

石川 逸子 (いしかわ・いつこ)

1933年生まれ。おもな詩集「千鳥ヶ淵へ行きましたか」(90年、花神社、第11回地球賞受賞)、「ロングラップの海」(花神社)、「たった一度の物語—アジア・太平洋戦争幻視片」(花神社)、詩文集「哀悼と怒り—桜の国の悲しみ」(御庄博美との共著、2012年、西田書店)。おもな著書「〈日本の戦争〉と詩人たち」(影書房)、「オサヒト覚え書き—亡霊が語る明治維新の影」(一葉社)

古びたトランクをさげて

本家の坂道を下っていく 健兄さんの姿を覚えています
いちどだけ ちらつと振り返ったようにおもいます

「面汚しもんが縊れて死んだと」

(わたし) は八歳でした 本家の伯父さんは

汗かきながらやってきて

「おう ビールくれ」と言いました

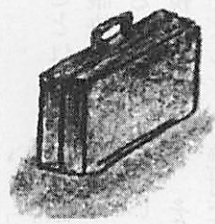
梅の花が白く咲きかけています

健兄さんのことが このごろ気になります

原爆ぶらぶら病は セシウム137のせいだったのです

あのと き 健兄さんはどんな目をしていたろう

白い花びらを仰ぐと ふと苦しくなります



記録としての詩誌 「つむぐ」(集プレス刊) 2013年秋 第九号